

# 「いざり車」とその周辺

高 阪 謙 次\*

A Study on “IZARI-GURUMA”

Kenji KOHSAKA

## 1. 目 的

歩行補助具には、弱った足ながらも本人が歩行するが、それを補助する道具である杖の類と<sup>1)</sup>、車輪付きの椅子や台に乗って移動するものの二つの種類に大別される。後者について、世界で初めて、現代のものに近い原理の車椅子が登場したのは、1650年のこととされている(図1)<sup>2)</sup>。わが国ではじめて車椅子らしきものが登場したのは、明治初期の「広重錦絵の三輪車」(図2)であるが、これは実用として存在したのかどうか、不確かである。確実なこととしては、1920年代はじめ、大正時代の「廻転式自在車」がわが国初の車椅子とされている(図3)。そして現代の車椅子に近いものの登場は、第二次大戦の戦傷者のために病院用に作られた「箱根式車椅子」である(図4)。1940年(昭和15年)頃のことである。こうしてみると、わが国において車椅子が、病院以外の一般の場所で使用されるようになったのは、戦後も幾分か経ってからということになる。

それでは、それまでのわが国の下肢障害者は、どのような歩行補助具を使用していたのであろうか。前者の杖の類は、有史以前から使われていたであろう。後者の車輪付き移動台の類についても、すでに存在が確かめられている。それは、「いざり車」などと呼ばれるものである。この呼称が、いつ頃どの範囲で使われていたかは、明らかではない。なお、人を指す際の「いざり」はいわゆる差別用語であるが<sup>3)</sup>、「いざり車」という呼称を、ここでは学問的な意味において、本人等がそのように呼称していた場合などでは、そのまま使わせて頂く。そのほかの場合は、原則として車輪付き移動台と呼ぶ。

車輪付き移動台(「いざり車」類)の存在は、幾つかの研究文献で紹介されている<sup>4)-7)</sup>。しかしこれらの研究では、その存在を紹介する程度で、背景などの分析には及んでいない。本稿では従って、こうした車輪付き移動台類の流布の状況、背景を、文献・記事や実地調査から、できるかぎり明らかにしたい。これを通じてわが国の障害者をめぐる物理的環境の歴史、あるいは文化史の解明に、少しでも資することができれば幸いである。

---

\* 生活科学部 生活環境デザイン学科



図1 ステファン・ファルファの  
世界初自走式車椅子 (1650年)



図2 広重錦絵の三輪車  
明治3年 (1870年)

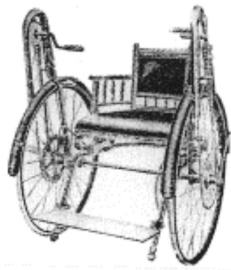


図3 国産初「廻転式自在車」  
大正10年 (1921年) 頃



図4 「箱根式車椅子」  
昭和15年 (1940年) 頃

## 2. 方 法

研究の方法は、主要には絵図などの文献資料の分析によった。ほかに、現物が保存されている場所での現地取材、そして一部、インターネットのウェブページの記事を利用した。詳細は以下の通りである。

### 2-1 文献資料

#### (1) 年中行事絵巻

12世紀の後半に、後白河法皇 (1155年～58年在位) の命で編纂された。当時の宮中や公家の年中行事を描いている。この製作には、絵師の常盤光長、故実家の藤原基房らが関わったとされている。「人物も建物も実際に忠実であったという著しい特色<sup>8)</sup>」を持つとされる原本は、江戸初期までにほとんど失われた。江戸時代に、現代に伝わっている写本がいくつか作られた。その中で最も重要とされるのが、寛文元年 (1661年) またはその直前に書かれたとされる<sup>8)</sup>住吉本である。車輪付き移動台は、この住吉本には描かれていないが、江戸時代後期の文化年間 (1804～1817) かその少し前に写された<sup>8)</sup>とされる鷹司本 (日本絵巻物全集 24、角川出版、1978) には描かれている。

#### (2) 病草紙模本

平安時代後期、12世紀半ば過ぎまたはさらに詳しく推定されたものとしては1180年代<sup>9)</sup>に、種々の奇病を集めて絵巻物 (関戸家本) にしたもの。関戸家本以外に、それとは「まっ

## 「いざり車」とその周辺

たく別の原図を写した模本がいく通りか伝わっている<sup>10)</sup>。そのうちの一つ（松井佳一氏所蔵本）に車輪付き移動台が見られる。この模本は「田中一松氏によれば、大体関戸家本と同時代の作品の模本とみてよいのではないか<sup>10)</sup>」とのことである。

### (3) 一遍聖絵

時宗の開祖一遍（1239-89）の伝記絵巻である。その弟子聖戒が、絵師と共に師の足跡をたどって全国を行脚して作成した。一遍没後 10 年で完成した。この絵図の画面は従って、13 世紀末頃の生活風俗を実地踏査に基づいて記録したものとして、社会経済史・民衆史の史料、あるいは障害者、貧困者の歴史資料としても、極めて信憑性の高いものである。本稿では、日本絵巻物全集 24、角川出版、1975、のものを使った。

### (4) 説経節・小栗判官・絵巻をくり・山椒太夫<sup>11)</sup>

説経節のルーツは、語り物とか口承文学としての「門説経」「ささら説経」であり、その成立時期は中世、室町時代のあたりとされている。この語り物は「乞食芸能として民衆の底辺にあり、長く歴史の地表にあらわれることがなかった」。これが刊本として世に出されたのは、江戸時代であり、その現存初出は、寛永 8 年（1631 年）である。この説経節のうち、小栗判官の刊本初出は延宝 3 年（1675 年）である。本稿で絵を引用した「絵巻をくり」は、これ以降の刊行であろう。山椒太夫の刊本初出は、寛永 16 年（1639 年）頃とされる。

### (5) 豊国臨時祭礼図屏風

慶長 9 年（1604 年）の秀吉七回忌にあたり举行された豊国大明神臨時祭の様子を描いた屏風。同年に狩野内膳が描いた。臨時祭の直後に描かれたものであるだけに、事実を忠実に伝えたものであろう。

### (6) 洛中洛外図－舟木家旧蔵本

元和元年（1615 年）～2 年の京都の景観を描いたとされる<sup>12)</sup>。活気にあふれる当時の京の様子を、種々の人物像を交えて描いている。

### (7) 和漢三才図会

正徳 2 年（1712 年）頃に発刊された百科事典である。寺島良安編。万物を 80 程の部類に分け、図を付けて説明している。東京美術、1970 年発行のものに依った。

### (8) 北斎漫画

江戸時代末期に葛飾北斎が描いた、万物の絵。東京美術、2002 年発行のものに依った。

## 2-2 現地調査

### (1) 平等寺

四国八十八箇所第二十二番札所で、阿南市にある。小屋車型の「いざり車」が奉納されている。2003 年 7 月 2 日に調査した。

### (2) 知多・曹源寺（03 年 8 月 1 日）

知多四国八十八箇所番外で、常滑市にある。「いざり車」が奉納されている。2003 年 8 月 1 日に調査した。

### 3. 考 察

#### 3-1 年中行事絵巻と病草紙模本

この二つの資料には、類似のシーンが描かれている（図5、図6）。なお、図6の左側には、子供が二人、それぞれに二本の綱を引いている様子が描かれているが、本のページの分れ目にそれがあるため、掲載できなかった。

類似点は、①乗っている人物（図5では老婆風に描かれている）の姿勢、②車輪が二つであり、前には意味不明の輪が一つ描かれていること、③前方に子供が二人いること、である。相違点は、①車や箱、軸の描かれ方がまったく違うこと、②図5では前方の二人のうち一人のみ綱を引き、もう一人は囃しているのに対し、図6では、二人が各々一本ずつ綱を引いていること、③図6では、子供がもう二人、後から押しているのに対し、図5にはそれがないこと、④図5では老婆が綱を掴んでいるらしいのに対し、図6では箱の縁を掴んでいること、である。

年中行事絵巻の原本は1150年代、病草紙は1180年代の京都の様子に取材しているといわれている。おそらく当時の京都に、こうした車に乗って子供に引かせていた人物が実在したのであろう。そして、病草紙がその実際をかなり正確に描いているのに対し、年中行事絵巻（鷹司本）のほうは、この病草紙のシーンを江戸時代の絵師が見るなどして、その記憶に基づいて街の点景として入れたものであると思われる。なぜなら、鷹司本のように子供が一人で綱を引き、それを老婆が掴んでいたのでは、とても動くとは思えないし、また、車の仕様が立派過ぎるのも首肯できない。そして、意味不明の一個の前輪が、鷹司本においては車軸が描かれ、しかも輪が歪んでいる。このようなところに、絵師の迷いが現れているように思える。

以上のことから病草紙は、たとえ模本といえども、1180年代の京都にこのようなシーンがあったことを現代に伝える貴重な資料となっている。

ここに描かれている車輪付き移動台は、おそらく人物運搬用のものではないであろう。土砂などの運搬用の、いわゆる「土車」であったと思われる。二輪なので、人間を運ぶには前後の揺れが激しすぎる。そこで後の子供が、押すと同時に、揺れ止めの役割を果たしていたのではなからうか。手前の子供の表情に、その困難さが表現されているように思える。乗っている人物は、服装からして、貧困者ではないようである。どこかへ行くのにこの車に乗っており、この子供達には駄賃をやったのではないかと想像する。

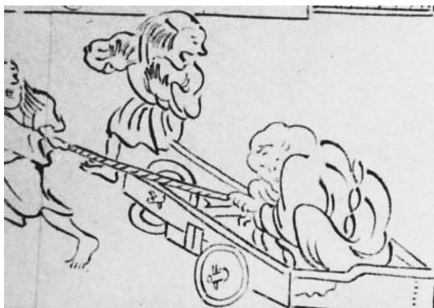


図5 年中行事絵巻

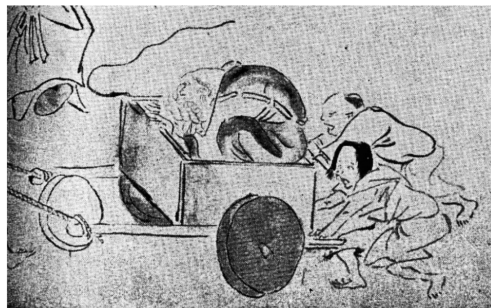


図6 病草紙模本

前に付いている輪のようなものの解明は、今後の課題にしたい。

### 3-2 一遍聖絵

一遍聖絵の「福岡の市」の場面に、図7の男性が描かれている。前述のように、この絵巻は現地踏査に基づいているので、九州福岡にこうした人物がいたのであると思われる。図が小さく不明瞭なので断言はできないが、人専用の車輪付き移動台であると考えられる。輪がどのようなものなのかは、この図からは伺い知ることができない。当時、これをどのように呼んでいたのかは分からないが、いわゆる「いざり車」らしきものの初見である。この絵巻ではほかに、下肢障害者も数多く描かれている。しかし、車らしきものを使っているのは、これのみである。

この絵巻ではほかに、天王寺の場面で、その塀の外に「小屋車」とでも言うべきものが五つ、ほかの普通の小屋に混じって描かれている（うち三つ、図8、図9）。図を見るかぎり、土車のようなものの上に小屋を作り付けたのではなく、小屋下を支える前後の横木の両端を突き出し、そこに車輪を付けたものようである。すなわち、専用として計画的に造った「車輪付きの小屋」であると言える。

天王寺には、宮本常一氏が言うように「こうした車のついた乞食小屋は実は第二次世界大戦の始まる前まで、天王寺付近にきわめて多かった」ということなので、700年程にわたってこうした小屋が「常設」されていたことになる。そうしてみるとこの車輪の目的は、多くの場所を転々と移動するためというよりも、一時的に移動を要請された場合（たとえば祭礼とか貴人の参詣など、あるいは時には戦乱）の便利のためと考えた方が良いでしょう。ことが済めば、戻ってくるのである。居住性が普通の小屋に比べて良いことも、例えば雨で地面が濡れた時のことなどを考えると、あったであろう。

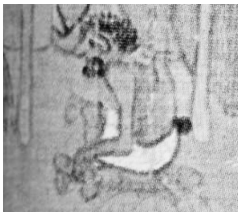


図7 一遍聖絵

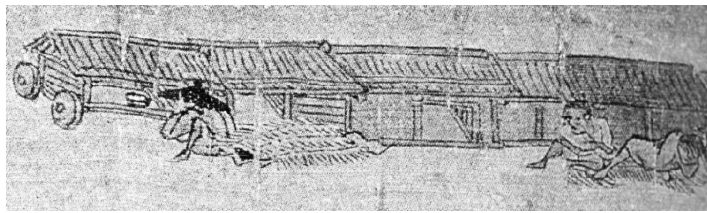


図8 一遍聖絵



図9 一遍聖絵



図10 四国八十八箇所 平等寺  
奉納「いざり車」

一遍聖絵には、路上生活者の「すまい」として、「小屋車」、普通の小屋、路上に板やむしろ状のものを差し掛けて棒で支えたもの、そして寺院などの床下、の四つの種類が描かれている。従って、「小屋車」が、それらの中では最も上等なものに位置する。小屋タイプのものは病人が使ったとする説もあるが<sup>7)</sup>、説得力に乏しいように思える。特に車付きのものについて、誰がどのように使ったのか、誰が作ったのか、あるいは誰が供給したのか等について、今後、研究を進めなければならない。

なお車輪付きの小屋は、江戸時代から昭和戦前の時期にかけて、下肢障害者が巡礼用に、使っていた。図10の平等寺のものは、三つの内中央のものが最も古くて、大正12年に奉納された。車輪は現在取り外されて無い。父親、巡礼者、犬などが引いて移動したのであろう。使った本人はこれを「覽（いざり）車」と呼んでいた。奉納に当たって本人が書いた由来書きは、次のとおりである。

#### 四週間通夜し覽全快

高知縣土佐郡地蔵寺村付の者筒井林之助（三十三才）は、大正十年五月脊髄病となり病勢日夜に重り遂にとり、此時日頃信仰せる弘法大師に御利益得んものと覽車を作り、父福次（五十六才）の手厚き看護を受けつゝ西國順拝の途に登り、大正十一年十二月十日下旬當山に参拝し、四週間程通夜し日夜當院主様の御加持を受けて一心に御本尊様に平癒を祈願してゐた所、漸次に此の痛みは薄紙を剥ぐ如く和らぎ、両杖にて歩行する事が出来る様になり、父と共に有難涙に御禮を御本尊様に申し、喜びのあまり車を奉納致します。 大正十二年十月十七日 高知縣土佐郡地蔵寺村 筒井林之助（三十三才）

このほか四国遍路で下肢障害者が、さまざまな形態の車輪つき小屋や台車を使って巡礼していたことを、喜代吉榮徳氏は紹介している<sup>13)</sup>。ここで氏は、車輪付き台車を「箱車」と呼んでいる。

### 3-3 説経節小栗判官・山椒太夫

絵巻をくりには、図11のような「土車」が描かれている。障害者を土車に乗せて引くという設定は山椒太夫のほうにもあり、病草紙の時期すなわち平安時代の末期以降、こうした行為は室町時代にも引き継がれ、存在したことを伺わせるものである。絵巻をくりの土車のデザインはしかし、室町の頃のものではなく、この絵巻が作成された江戸時代、1700年前後のものをモデルに、絵師が書いたと想定するのが自然であろう。

小栗判官の物語で「土車」に乗った餓鬼阿弥（すなわち小栗）は、藤沢から熊野の山裾



図11 絵巻をくり



図12 豊国臨時祭礼図屏風

まで「車道」を引かれて行く。かなりの長距離な旅である。語り物としての誇張が相当あったにしても、そのような道路や交通の条件がこの時代、整ってきたことを伺わせる。山裾から熊野の湯之峰までは、背負われて登る。当時、湯の峰はハンセン病患者を拒まなかったとされるから<sup>14)</sup>、藤沢からというほどの遠路ではないにしても、実際にハンセン病患者が「土車」に乗せられて山裾までやってきて、背負われて登るということは、事実としてもあったのではないかと想像される。

### 3-4 豊国臨時祭礼図屏風と洛中洛外図

図12は、豊国臨時祭の施餓鬼の様子を描いた部分の一部である。障害者が多く集まっている。この祭礼の4年前には関が原合戦があった。その戦傷者が、この障害者の中には多く含まれていると思われる。左上の人物のすぐ下には、車輪付き移動台に乗って、棒で後に突いていると思われる人物がいる。右下隅の人物も、車輪付き移動台に乗り、手で後に突いているところと思われる。

この豊国臨時祭の約12年後の京都を描いたのが、舟木家旧蔵本の洛中洛外図である。空前の活況を呈する京都の様子が、生き活きとした人物描写を含めて、風俗絵風に描かれている。車を引く人物を描いているこの部分(図13)は、一見すると、物を運んでいる男が描かれているようにも受け取れる。しかし、台の上に乗っているのが毛皮の座布団様のものであることや、うしろの、驚いた様子に描かれた子供のことを勘案すると、この場面は、下肢障害者であるはずの男が、自分用の車輪付き移動台を力強く引っ張っているところのようである。それを見て、子供が驚いているの図、ということなのであろう。施しを受けやすいということから、「にせ障害者」もいたのであろう。車輪付き移動台が露出した形で描かれているが、残念ながら、その構造が分かるような描き方にはなっていない。

### 3-5 和漢三才図会と北斎漫画

和漢三才図会の「躰(いざり)」の項に、図14の絵が描かれている。デザインや乗っている人物の服装から推測して、室内用のようである。江戸時代中期には、このようなものが現れていたのであろう。腰掛けスタイルに近いので、介助型「車椅子」とも言えそうな雰囲気になっている。

北斎漫画には、図15、図16の二種類の車輪付き移動台が載っている。図15の方は、宗匠風の人物が2本の棒で漕いでおり、図16は簡素なものを1本で操作している。前者は、



図13 洛中洛外図—舟木家旧蔵本



図14 和漢三才図会

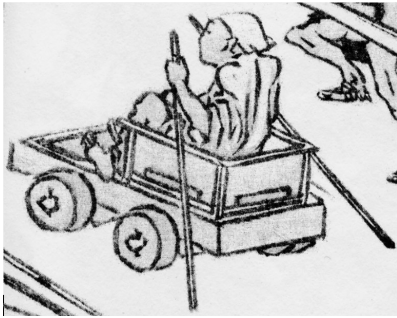


図15 北斎漫画



図16 北斎漫画



図17 知多 曹源寺 奉納「いざり車」

土車（土砂などの運搬車）などの台車の上に腰掛部分を重ねて作ったようにも見える。

### 3-6 近年

図17は、現存する珍しい「いざり車」である。大正12～13年に使われていた。木の車輪部分には鉄が巻いてあり、車軸は鉄の棒である。犬に引かせていた。

このような、車輪付き移動台（「いざり車」）は、第二次世界大戦中までは、少なくとも使われていた。木下金雄氏による次の記事を引用する<sup>15)</sup>。

それはちょうどあの第二次世界大戦中の最中でした。……幼い私の記憶にはっきり焼き付いて離れないある出来事があります。私が幼い時に住んでいた村に、両足の全くきかない障害者が一人で住んでいました。年の頃は30才か40才くらい。いつも外出する時はいざり車といって四角い木の箱に車が四つ付いただけの簡単な乗り物を、二本の棒で器用に漕いで、ガラガラと音をたてながら道路を行くのでした。……

そしてそのおじさんはいつも、そのいざり車で私の家の前の街道を通りかかります。おじさんの回りにはいつも子供達がいまして。「いざりいざり」とからかったり、「かたわ」などと言って馬鹿にしたりします。そして時には、事もあろうに石をぶつけるのです。こんな事をされても、そのおじさんには全く抵抗することも反撃する術もないのです。ただでさえ生きるのが大変な世の中、重いハンディを背負った上に子供達にまでこんな事されてはたまりませんね。さぞつらかったでしょう。悔しかったでしょう。そして私が今一番慚愧の思いに耐えないのは、私もその悪ガキ達の仲間に加わって居たい



う事です。そのうちにそのおじさんは私の目からも、その村からも消えてしまいました。  
……

#### 4. 総 括

- ① わが国の障害者歩行補助具として、「車いす」の前史として、平安時代（1100年代後半）から第二次世界大戦中（1940年頃）までの800年程、車輪付き移動台（いわゆる「いざり車」）が存在した。「いざり車」は、わが国の中世から太平洋戦争前後にかけて、長期にわたる基本的・一般的な障害者向け歩行補助具であった。
- ② これは、地面から10-20cmの高さの座板に、車軸、4輪を付けるのを基本とした。これに側板などを取り付けるものもあった。
- ③ 移動には自走と介助があり、前者では2本または1本の棒、あるいは手で、あるいは手に下駄様のものを付けて、地面を押して動いた。
- ④ 土砂等の運搬用の「土車」も、移動具として活用していた。
- ⑤ 移動式簡易住居とも言うべき「小屋車」「箱車」もあり、これも一部では「いざり車」と呼ばれていたらしい。中世から昭和・戦前にいたるまであり、比較的狭い範囲を移動したもの（たとえば天王寺のもの）から、巡礼など遠距離移動に使われていたものまであった。これは、人または犬が引いた。

#### 注

- 1) 矢野憲一、杖——ものと人間の文化史 88、法政大学出版局、1998に詳しい。
- 2) 以下、車椅子に関してはウェブページ、高橋義信、車いすの歴史、による。  
<http://www.wheelchair-sig.jp/rekisi.html#5>
- 3) 差別用語辞典の類は市販されていないようである。ウェブページにはいくつかの「差別用語辞典」類がある。例えば次のページには「いざり」が掲載されている。  
<http://www.toshima.ne.jp/~gammaray/jiten.sabetu.html>
- 4) 徳江元正、『土車』の周辺、国学院雑誌 第62巻第10号、1961
- 5) 河野勝行、障害者の中世、文理閣、1987
- 6) 花田春兆、日本の障害者——その文化史的側面、中央法規出版、1997
- 7) 新村拓、病の図像表現、一遍聖絵を読み解く、吉川弘文館、1999
- 8) 福山敏男、年中行事絵巻について、日本絵巻物全集 24、解説 p. 8、角川書店、1978
- 9) 小松茂美、図版解説、飢餓・地獄・病草紙と六道絵、日本絵巻大成 7、中央公論社、1977
- 10) 家永三郎、図版解説、日本絵巻物全集 7、角川書店、1976
- 11) 荒木繁、解説・解題、説経節、東洋文庫、1973
- 12) 内藤昌、洛中洛外図の景観分析、洛中洛外図大観——舟木家旧蔵本、小学館、1987
- 13) 喜代吉榮徳、へんろ人列伝、海王舎、1999、pp. 147-171
- 14) 河野勝行、前掲書、pp. 110-117
- 15) 木下金雄、土自己つうしん 100号、<http://www.onyx.dti.ne.jp/~doronko/tuusin/>